# 登米の就職事情

**就職希望の高校新卒者の地元就職率は約4割。合併後、企業誘致で求人数が増えても若者が地元に残らない理由は？**

## 求人数増えるも

近年、地方では若年層が大都市へ流出。これにより、地元への就職率が低くなっている。２０１４年度県内の高校新卒者の地元就職率は県平均52・3パーセント。本市の就職希望者は２０５人で、うち83人、40・5パーセントが地元希望者と10ポイント以上、県平均を下回る。県外は45人、仙台市は28人と計35・6パーセントが就職している。

市の持続的な発展に向けては、若者の定住化は必須であることから、合併直後から、工業団地を整備し企業誘致活動を展開。この10年間で、自動車関連産業を中心に11社の企業を誘致してきた。この結果、新たに約４００人の雇用を生み出している。しかし、受け皿となる雇用の場は増えているものの、大きな伸びが見られない状況が続いている。

この原因としては大きく２つの理由があげられる。一つ目は、昔から登米市は市外からの就職者が多いこと。これについて菅原淳ハローワーク迫所長は「登米市は近隣市町からのアクセスがよく、優良な企業が比較的多い地域。このようなことから、栗原市や南三陸町、岩手県一関市から登米市に職を求めてきています。東日本大震災以降は、特に沿岸部からの就職者がふえてきているようです」と語る。

二つ目は、求人と求職がかみ合わない労働需給のミスマッチ。「希望の雇用形態でない」「賃金水準が低い」「企業が求める人材ではない」など、求人があっても雇用に結びつくとは言い切れない。若い年代は、特に事務職やサービス業を好む傾向にあり「製造業離れ」が全国的に進んでいる。

伊藤秀樹市新産業対策室長は「就職率はもちろんですが、幅広い業種に対応していく必要があり、企業と行政が一体となって取り組んでいくことが必要です」と話す。

## キャリア教育による学び

経済情勢や登米市の立地的構造などが、地元就職率の低さにつながる要因となっていた。しかし、それだけではなく、若者たち自身の変化も影響しているのではないだろうか。

近年、大卒者や大学院卒者でも就職が難しくなり、定職に就かない若者が増えている。厚生労働省が15～24歳の若者を対象に実施した調査で、約４割が働く目的を「楽しい生活をしたい」と回答している。「責任を伴うことはできるだけ避けたい」「努力や訓練が必要なことはあまりやりたくない」と考えている人が増えていることも分かった（労働者の働く意欲と雇用管理のあり方に関する調査から）。

こうした若者の意識の変化には、社会環境の変化が大きく関係していると考えられる。

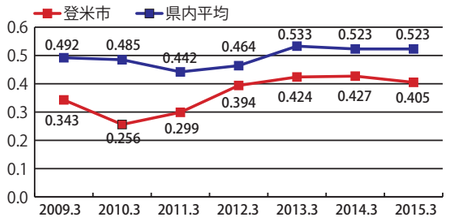
少子高齢化の進行、核家族の増加、個人主義の風潮の高まりにより、地域付き合いが激減したこと。一昔前であれば、隣近所とは家族同然の付き合いだった。悪いことをする子どもがいれば、容赦なく怒るおじさんがいた。同年代の友達がたくさんいて、その家族とも仲良く付き合っていた。

普段から大人も、子どもも関係なく日常的に関わっていた。しかし、核家族化が進み、個人主義の風潮により、地域と触れ合う時間は激減した。他人とのコミュニケーションの取り方が分からなくなったのではないだろうか。

このような中、子どもたちの理解力、コミュニケーション能力や情報活用能力などを向上させ、職業観や人生観を醸成することを目的に、キャリア教育が導入されている。市内でも全中学校で実施され、子どもたちからは好評を得ている。

また、高校では、企業での職場体験をするインターンシップを実施している。

登米総合産業高校の鈴木琢也校長は「生徒たちが、職業を選ぶ際になかなか答えを出せないのは、実体験の経験値が足りないのかもしれません」と話す。「ある生徒が、夏休みに介護現場で実習し、大きく成長して帰ってきました。それまで介護職は、厳しく大変というイメージを持っていたようです。しかし、人の命を預かる貴重な仕事だと言うことに気づいたと感想を書いてきました。入浴介助をしたときに利用者から『気持ちよかった、ありがとう』と言われ『体験してよかった』と言っていました」。このようにキャリア教育の効果は着実に表れている。




**就職を希望する高校新卒者の市内への就職割合の推移**

資料：宮城県労働局職業安定部職業安定課（新規学卒者の安定所別職業紹介状況）

ハローワーク迫
所長　菅原淳さん

## 他市町からの流入

企業の雇用については、当たり前のことですが、景気によって左右されます。08年のリーマンショックの影響で、企業の体力は一気に減退しました。08年度の高校新卒者の市内就職率は25.6パーセントとここ10年で最低の数字となっています。

その翌年に起きた東日本大震災により、建設業を中心に求職率は上向きとなり、現在では40パーセント付近で推移しています。

登米市は、昔から市外からの就職者が多い地域です。近隣の市町からのアクセスがよく、優良な企業も多いため、外からの人気が高いと言えます。このことが、新卒者の就職率を下げている一因だと推測します。また、若い年代は事務職やサービス業を好む傾向にあり、希望の職種が不足していることもあり、外に出るのかもしれません。ハローワークは、再就職だけではなく、幅広い業務を展開していますので、ぜひご利用ください。



## 登米総合産業高3年生「私の進む道」

**佐藤祐希さん**
（電気システム科、錦織２区）

東北職業能力開発大学校への入学が決まりました。すでに進学している兄の勧めもあり、私も同じ学校に行くことにしました。先日まで大学卒業後は、自動車メーカーへの就職を目標にしていました。しかし、自分がやるべきことは、日本工業界の裾野を広げること。目標を変更して工業高校の教師を目指します。

**佐藤勝仁さん**
（情報科、米谷３区）

大崎市の電気部品製造会社から内定をもらいました。機械整備関係の仕事に就きたかったので米谷工高に進学。高２から、コンデンサを使用する授業が多くなったことをきっかけに、その方面の企業に進もうと思いました。「コンデンサ生産量日本一」の企業から内定を貰いました。夢がかなってうれしいです。

**佐々木彩加さん**
（普通科、迫町八日町）

市内の縫製会社から内定をもらいました。好きなことを仕事にできて、とてもうれしいです。小３の時、姉に教えられたのがきっかけで手芸を続けていました。高校入学後までは、祖母の家に行くことが多かったため、老人を支える介護職に付きたいと考えていました。目標を途中で変えましたが、後悔していません。

**登米総合産業高校**
**校長**
**鈴木琢也さん**

本校には「モノづくりをしたいから機械科」に入りたいなど、目的意識を持って入学する生徒が多いです。世間では、若年層の製造業離れが叫ばれていますが、本校ではあまり考えられない問題です。

むしろ、「どのようなモノづくりをしたいか」というところで、迷う生徒が増えてきているように思えます。現代は、インターネットや携帯電話の普及により、情報があふれています。この情報量の多さで、判断しかねている部分があると思います。

本校では、さまざまな職場を体験するインターンシップを実施しています。実際に体験し、人付き合いをすることで、生徒たちは自分のやりたいことが見えてきています。やはり、生の情報に触れることが、生徒たちを成長させるのだと感じています。